

子育て世代の健康な生を支える学

一親になるプロセスを支える学の構築一

健康科学部 看護学科 藤田藍津子・玄番千恵巳・今留 忍 / 人文学部 教育福祉学科 田中恵美子

背景および目的

現代社会では、核家族化や地域とのつながりの希薄化により、家族や地域における子育て機能の低下、子育て中の母親の孤立化や不安が大きな課題となっている。大学が所在する狭山市では、地域の子育て家庭に対する育児支援のための各種事業を実施している。子どもと一緒に参加できるイベントや保護者のリフレッシュのためのプログラム、子育て講演会などを実施し、家庭での育児を支援するとともに子育て家庭の交流を図っている。しかし、狭山市で平成28年1月、3歳女児が虐待により死亡するという痛ましい事件が発生した。大田区での3歳男児の死亡事件など、児童虐待により幼い命が奪われる深刻な事態が続いている。そこで、地域にあってさまざまな専門分野の人材を擁し、人的・物的資源を有している大学が、支援体制の拠点となり、地域の子育て支援プログラムを開発することが本研究のねらいである。開発に向け、1年目（2018年度）は、大学の子育て支援施設を利用する保護者を対象に、大学の子育て支援施設を利用する理由や期待するものを明らかにするために、インタビュー調査を実施した。その結果、乳幼児期の育児における母親の身体的・心理的・社会的な体験が明らかになった。2年目（2019年度）は、1年目の研究結果を踏ま

え、調査対象者を狭山市・入間市に在住する子育て中の保護者に拡大し、地域子育て支援施設に求める役割、支援のあり方について質問紙調査を用いて明らかにする。

方法

調査対象および調査期間

1. 調査対象者：狭山市・入間市の子育て世代へ、子育て支援に関する質問紙を2000部配布し、郵送にて回収した。配布先は、市役所を通じて公立保育所18ヶ所、児童館、子育て支援センター6ヶ所である。調査期間は、2019年12月～2020年1月である。
2. 調査内容：属性、子どもの人数と年齢、仕事の有無、働き方の変化、特別な支援の有無、子育てへの感情、期待する支援・プログラム、自由記述では「子育てへの思い」「子育て支援について」を質問した。
3. 分析方法：設問の結果を単純集計し、自由記述は内容ごとに分類し分析をした。
4. 倫理的配慮：東京家政大学研究倫理委員会の承認を得て行った。（健2019-3）

結果

郵送にて回答のあった質問紙は、552名（回収率約28%）であった。552名中、居住地は、狭山市256名（46%）入間市283（51%）、その他の地域13名（2%）、母親521名（94%）、父親29名（5%）であった。子育てへの思いでは、①幸せ341名（61%）②楽しい324名（59%）③疲労感287名（52%）④うれしい191名（35%）⑤充実している181名（33%）であった。期待する子育て支援では、①反抗期について294名（53%）②発達281名（51%）③子育てカフェ230名（42%）④救急法221名（40%）⑤クッキング：時短料理・親子料理206名（37%）であった。Fig.1は、期待する子育てプログラムの結果である。自由記述では、子育てに喜びや充実を感じると共に、仕事と両立の疲労、自分の時間の少なさ、心身の不調に関する記述が目立った。少数意見ではあるが、災害時の備えを知りたい、大学に育児相談をできる場所を作ってほしいとの要望

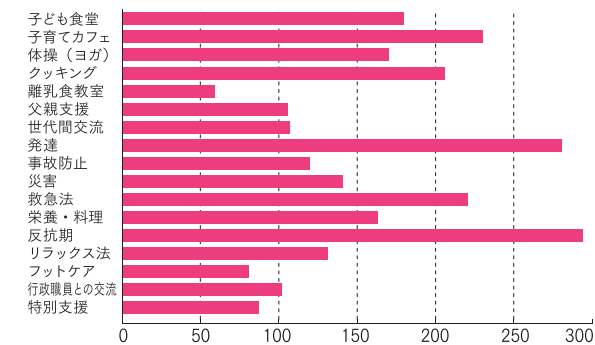


Fig.1 期待する子育てプログラム

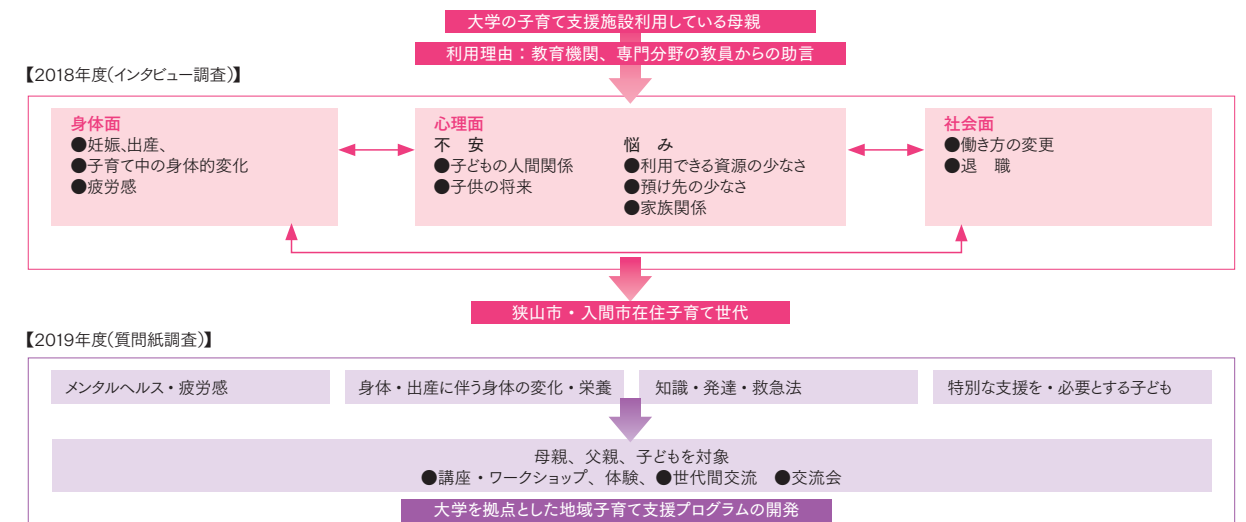


Fig.2 子育て世代の経験と期待するプログラム

もあった。Fig.2は、2018年度と2019年度の成果を基に、子育て世代の経験と期待するプログラムを図に示したものである。

考察

回答者は母親が多く、子育てに対して肯定的に捉えつつも、疲労感や不安に関する側面も抱えていた。期待する支援・プログラムでは、発達や救急法などの知識、メンタルヘルス、体へケア、栄養、子育てカフェが多かったことから、知識を得て、心や体のケア、子育て世代が交流できる場を期待していることが考えられた。回答した父親は、父親を対象とした、具体的な育児方法（料理、反抗期の子どもへの対応）のプログラムを期待していた。さまざまな専門分野の人材を有する本学が、子育て世代の健康な生(Life)を支えるにあたり、支援体制の拠点となり、心や体をケアし、交流できる場を提供するプログラムの開発に向け取り組むことの必要性が示唆された。

今後の展望

質問紙調査の結果を踏まえ、講座型・ワークショップ型・体験型の形式による大学を拠点とした子育て支援プログラムを開発と実践をする。